

QE3 期待と豪ドル安という矛盾

マーケット エディターズ・吉田 恒

豪ドルは、8 月以降対米ドルで 1.06 ドルから 1.0 ドル割れ近くへ反落した。一方で、8 月後半以降、QE3 期待が再燃し、コモディティ相場が一段高になっていることを考えると、違和感のある動きではある。

◆コモディティ高での豪ドル安は続くのか

《資料 1》は、2010 年 11 月に QE2 開始となった前後の CRB インデックスと豪ドル(対米ドル)の動きを見たもの。QE2 前後の、最も顕著な相場の動きはコモディティ相場の一段高だった。それは翌年以降の、いわゆる「アラブの春」、中東・アフリカ民主化のきっかけになったとされる。

そんなコモディティ相場と、代表的な資源国通貨である豪ドルは強い相関関係が良く知られている。2010 年 11 月 QE2 前後でも、コモディティ相場一段高に連動した形で、豪ドルも一段高となったわけだ。

《資料 1》



さて、8 月後半から米追加緩和期待、QE3 期待が再燃している。その中で、《資料 2》のように CRB インデックスも上昇傾向が続いている。ところが、豪ドルはむしろ 8 月以降反落となってきた。

QE2 のケースでは、それが実施された後に、CRB インデックスも豪ドルもさらに 4-5 か月も続伸となった。今回の場合まだ QE3 をやるかはわからないが、それでも何らかの追加

緩和は必至との見方が有力だ。そうであれば、CRB インデックスも一段と上昇する可能性がある。

豪ドルは、経験的には「買われ過ぎ」の限界圏に達しており、その反動が最近にかけての反落の主因と考えられる。ただ、QE3 の可能性がくすぶり続ける中で、コモディティ相場との関係も考えると、豪ドル反落が一段と広がり、長期化するかは疑問ではないか。(了)

《資料2》

